

川村学園女子大学研究紀要 第22巻 第2号 239頁—253頁 2011年

女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化

長 崎 靖 子*

The Change of Social Consciousness with Female Students' Language

Yasuko NAGASAKI

要 旨

本稿では、昭和13年の女学生の「君」「僕」使用に関する新聞記事を中心に、女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化を探った。

女学生という風俗が生まれた明治以降、その服装や振る舞い、言葉遣いに対する記事が新聞に見られるようになるが、多くは新しい風俗に対する批判を伴うものであり、女学生の使用する「君」「僕」もその一つとして批判的となっていた。しかし、女性の社会進出、教育の拡大につれ、女学生に対しての新聞の扱いやその論調には変化が見られる。昭和13年の文部省（現文部科学省、以下文中では当時のままの文部省とする）の通達を発端とする女学生の「君」「僕」に対する言葉遣いの論評には、「君」「僕」使用を一時の流行として受けとめる姿勢が多く、そこには女性の社会進出に伴う意識の変化が窺われる。

現代になると、男性の仕事、女性の仕事という役割分担の垣根が低くなり、これに伴い、男性の言葉、女性の言葉という差がさらに縮まり、中性化された言葉遣いが増えてきている。社会の動きとともに女学生の言葉に対する意識が変わり、「君」「僕」に関しても中性化された人称代名詞になっていくのではないかという意見も見られ、今後の動向が注目される。

キーワード：女学生、言葉遣い、男らしさ、女らしさ、中性化

1. はじめに

明治時代に誕生した「女学生⁽¹⁾」の風俗は、当時の新聞紙上で様々に取上げられているが、その多くは彼女たちの服装や言動、振る舞い、そして言葉遣い等に対する厳しい批判を伴うもの

*教授 日本語学

であった。筆者も拙稿（2007）で、明治期の女学生が使用する「君」「僕」に対する批判記事をいくつか紹介しているが、女学生の使用する「君」「僕」に関しては、明治以降の新聞にもたびたび取り上げられ、現代でもその使用に関しては、是非が問われる問題である。そこで本稿では、昭和13年文部省から端を発した女学生の「君」「僕」の使用に関する議論（以下この議論を「キミ・ボク」問題と呼ぶ）を中心に、明治時代から現代にいたるまでの女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化を、新聞資料を通して考察する。

2. 新聞記事に見る明治の女学生

まず、明治以降の女学生の風俗に関する批判記事を、その服装や振る舞いから追っていく。女学生の服装に関しては、明治7年（1874）の郵便報知新聞に次のような記事が見られる。（以下、引用部分の下線は筆者による）

近來笑うべき一事あり、女子にして男子の袴を穿つ是なり（中略）今日我邦にても婦女子にして袴を着し昂然として毫も耻る意なし甚哉奇異の風體實に國辱とも云うべし（中略）若し其父兄右等の醜體を良とし常に男袴を穿たしめなば、其女も亦男子の眞似するを良と思ひ立小便をなすに至るかも計り難し父母能く注意すべきものなり。

（第一大区、開化生 郵便報知新聞 M.7.1.15 投書欄）

明治5年（1872）、学制の頒布とともに官立女学校が開学するが、これに当たり、女学生たちに袴の着用が認められた。当時はいわゆる女学生スタイルの定番といわれる「女袴」ではなく、男性が用いていたのと同じ「男袴」が着用された。上記の郵便報知新聞掲載の投書は、女性のこのような服装に苦言を呈する内容である。明治8年（1875）の読売新聞には「○開化百馬鹿の四」と題された投書の中に

（略）「君のお袴の紫はいゝ色ですねエ」「是は僕の伯父が商法を始まして先日一反僕に袴をいたせといつて投與されましたよ」（略）

（浅草奥山 曾我辰之 読売新聞 M.8.10.3 寄書欄）

という「学校娘（投書の記載による）」の会話が載っているが、ここに見られる袴も男袴と考えられる。同じ記事の中では、

（略）「おちやさん僕の北堂がね先日お前はモウ他へ嫁さないと時が後れるから人依頼して置たと申しましたが否なことけちな官員や何處の馬の骨だか知れない書生なんぞに配偶するよりも早く女教師に成つて氣樂になれねばねエ芝居も勝手にかつていかれナイスの俳優も上げられモニイが澤山有れば男妾でも何でも置けますから今のうち勉強して何でも女教師に

女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化

な つも りでゐますは」

という言葉動に対し、「男妾や芝居へいく目的で女教師に成られてたまりますものか」と批判的なコメントが見られる。

女学生の振る舞いに関しては、読売新聞明治22年(1889)に「女生徒の品行」と題して次のような記事が載せられた。

ところ かん だ みやうじんしたへん こりやう り や に かい きやく なんによさしむか をとこ とし ぐわんいんふう
處は神田明神下邊の小料理屋の二階、客は男女差向ひ男は年ごろ廿八九の官員風チヨ
ツキ丈白リンネルにした洋服を着て八の字を生しシガレットを吹しながら連の婦人に對ひ
「すね子さん今一つ召上りませんかジャパニスワインがお否ならビーヤを取ませうと云れ
てすね子は最大分廻たと見え臉をホンノリ赤くし目を少しトロンコにして切下の前髪をう
るさそうに搔退けながら「もう澤山です先刻から大分戴きました(中略)

(読売新聞 M22.5.31)

この記事の後半部分に、この女性は「或る品行正しく浮氣娘お茶ツピー杯は鐘太鼓で探しても
ひとり な めつぼうひやうばん あ ちよがくかう せい と ちよがくせい まへ ちん ど さんにんづれ
一人も無いと減法評判のよい或る女学校の生徒にて」とあり、女学生であることがわかる。
品行の良い女学校の生徒が、男性と飲酒していることを皮肉をこめて咎めた文章である。また、
読売新聞明治23年(1890)には

(略) いッさくへ や あるひと ほんごうたけちやう よ せ おもむ ちよがくせい まへ ちん ど さんにんづれ
一昨々夜或人が本郷竹町の寄席に趣きしに一人の女學生が前に陣取りし三人連の
しよせい うちすこ いろ なましろ をとこ を め な よそめ を か ほどいかは ふるまひ およ よ せ
書生の中少し色の生白き男の居りしに目を無くし外目可笑しき程如何しき與動に及び寄席
のはねるを待たず其書生の歸り去りし跡を追うて女學生も續いて席を立ちしかば(略)

(読売新聞 M.23.2.5 雜報欄)

という記事が見られる。「女學生の沒道德」と題されたこの内容は、寄席を見に来ていた女学生が、三人連れの書生の一人に好意を持ち、そのあとを追っていったというものであり、最後に「若し其の女學生にして此の雜報を讀みたらんには良心に對し如何なる感覺を起さるゝか記者は其お顔を拝見仕つり度思ふなり」とし、この女学生の行為を揶揄している。このように、明治の女学生関係の記事には、その風俗に対する批判的な内容のものが多く、殊に明治23年から24年にかけて読売新聞では、「女學生の醜聞」⁽²⁾、「女學生の弊風」という続き物を組んで女学生という風俗に対する批判記事を載せており、その関心の高さが窺われる。

3 女学生の言葉遣いに関する記事

女学生の服装や振る舞いとともに、その言葉遣いもしばしば批判の対象として記事に取り上げられている。読売新聞明治12年(1879)には、伯父に新年の挨拶をする少女の記事が見ら

れる。

(略) 伯父さんお目出とう新年の御慶を申し上げます「ヲ、お竹か大きく成ツたノ今年は何歳に成ツた「僕は七年十月月に成ります「コレへ女の子が其様な生意氣な言葉を遣ふものでは無い七才なら七才八才なら八才と云ふものだ此節の子供は學校言葉ばかり遣ふからさツぱり分りやアしねエ (略) 一体僕といふのは何の事だ「僕といふのは私しといふ事でございます「夫れでは矢張私しといふが宜い其様な符課を云ツては分らねエ (略)

(幸堂得知 読売新聞 M.12.1.17 寄書)

少女の使う「七年十月月」という漢語に対し、その伯父が「女の子が其様な生意氣な言葉を遣うものではない」とたしなめる内容である。また、「僕」という一人称に対しても、「其様な符課を云ツては分らねエ」と批判している。同じような記事として読売新聞明治13年(1880)には次のような投書が載せられている。

○男子と生れるも女子と生れるも造物主の御意次第しかれども男は姿も詞もおのづから堅く女はどこまでも柔和なるが愛敬も有りおとなしやかにて宜いやうに思はれますが近年は熾んに女の漢學が流行にて島田蟠や蝶々蟠でいかめしく袴を着したる形は誠にや見悪く従がツて言ふ詞が生意氣の漢語にて君僕などは聞ても胸が悪くなります (略)

(竹窓閑人 読売新聞 M.13.5.13 寄書)

女性が漢語⁽³⁾や「君」「僕」の人称代名詞を使うことを批判する内容である。前述した読売新聞明治8年10月3日の記事でも、女学生が「投与」「北堂」「配偶」などの漢語や「僕」「君」という人称代名詞を使用している。さらに、この記事の中には「ナイス」「モニイ(金)」といった外来語⁽⁴⁾も使われているが、これは坪内逍遙の『當世書生氣質』(明治18～19年)にも特徴的に見られるように、男子学生の間で盛んに使われた言葉であった⁽⁵⁾。

明治時代、女学生の言葉遣いとして特に注目された「てよだわ」言葉に関しては、読売新聞明治24年(1891)の「○女學生の弊風 (其三)」に次のような記事が見られる。

(略) 昔し氣質のお婆さんなどは「そーねー」とか「アラヨクッテヨ」とかいう口調を聞てさへ眉を顰む程なるに (略)

(読売新聞 M.24.9.8 雑報欄)

「てよだわ」言葉に関しては内田魯庵の『文學者となる法』(明治27年刊)の中でも「教師の眼を竊んでは、『よくツてよ』派小説にう現を抜かすは、此頃の女生徒氣質なり」とあり、当時「てよだわ」言葉を使用する小説が多く出回り、それを愛読する女学生が多かったことを示している。

以上に見てきたように、女学生の言葉遣いでは、「てよだわ」言葉や「君」「僕」の使用が常

に批判を受けているが、これらの批判の内容は各々に異なるものである。「てよだわ」言葉に関しては、特にその出自が批判の対象とされる。読売新聞明治 38 年（1905）に「●女學生と言語」という題で次のような記事が見られる。

すねんまへ ちよがくせい おのづか ちよがくせいやう こ しゅうかうしやう くてう
數年前までは女學生には自ら女學生用語なるものありて一種高尚なる口調なりしことは
ちよ し けういく けいけん し ところ しか きんねんちよがく ぼつこう したが ひ かくてき か りうしやくわい し
女子教育に経験ある人の知る所なり然るに近年女學の勃興するに従ひ比較的下流社會の子
ちよ きは た する かくちよがくかう にふがく いた いはゆる みせ むすめこども もち げん こ ちよがく
女が極めて多數に各女學校に入學するに至りしより所謂お店の娘小兒が用ゆる言語が女學
せいけん もち いた さ かか れい こと
生間に用ひらるゝに至れること左に掲ぐる例の如し

○なくなつちやつた○おーやーだ○行つて、よ○見てよ○（い）行くことよ○よくつて
よ○あたいいやだわ○おツこちる○のツかる

けう し めんぜん あ ほん か げん こ もち くれら ひかへじよもし うんどう ば いた
教師の面前に在りては殆ど斯る言語を用ひざれど一たび彼等の控所若くは運動場に至れば
うらだな むすめら てふ／＼なん／ しやべ を ことな さら つぎ げん こ み
裏店の娘等が蝶々喃々と饒舌り居るに異ならず而して更に次の言語を耳にすべし

○失敬なんだよ○君○僕○無禮千萬だわー○君遊びに來玉へな○その他男子學生の用ゆる常語（略）

更に又少しく注意して聽けば

○ミス○ミセス○ハズバンド○スウキトホーム○理想のホーム○ラブ○ワイフ

（読売新聞 M.38.3.16 雑報欄）

この記事の中では、「てよだわ」言葉は、「下流社會の子女」から広がりを見せているとする。同様の内容を示す記事が読売新聞昭和 10 年（1935）8 月 5 日の「読売婦人評論」に、掲載されている。

今から卅年前目下断髮禁止令で名聲を博している府立第二高女に私の在學していた頃、時の校長は『てよ、だわ』禁止のお觸れを出したことである。即ち「よくてよ」「いやだわ」式の言葉は、元來花柳界の女性の慣用語だつたのを、彼女らが明治元動の間に勢力を得てから、その影響が上流へ、ひいて一般婦人へも及んだ結果であつて斷じて良家の子女の口にすべきものでないといふのだつた。成程「よくてよ」「いやだわ」は上品な言葉ではない。といつて校長閣下の命令どおり一々「よろしうございます」「いやでございます」といつてゐたのでは短い遊び時間に用が足りない。結局せつかくのお觸れも無視され、黙殺されたまゝで終わつた。

（読売新聞 S10.8.5 「読売婦人評論」）

「女の髮、女言葉」と題されたこの評論は、女性運動の指導者として知られる山川菊榮（1890～1980）が書いたものである。昭和 10 年より三十年余り前ということであるから山川菊榮の在學時期は明治 30 年代あたりのことであろう。この時代よりやや下るが、読売新聞大正 4 年

(1915) 2月27日には、

数年前から女學生間に流行してゐる「よくつてよ」「いやだわよ」「あらいやーよ」など
と氣障な甚だ耳障りになる言葉の改良に腐心してゐます

(読売新聞 T4.2.27 「●女學生間の言葉の改良」)

と、小石川竹早町の第二高等女学校が、言葉の改良を行っているという記事を書せており、「てよだわ」言葉が女学校の中で依然として批判されていたことが知られる。

山川菊榮は記事の中で、「てよだわ」言葉が「花柳界の女性の慣用語だつた」、「上品な言葉ではない」と述べているが、「てよだわ」言葉の出自に関しては、尾崎紅葉が『貴女の友』25号(明治20年)で、次のように述べている。

(略) 流行といふ事万につけてあるものながら別けておかしく覺ゆるは言葉の流行なり。
しかとは覺えねど今より八九年前小學校の女學生がしたしき間の對話に一種異様な言葉
づかひせり。

(梅はまだ咲かなくツテヨ)

(アラもう咲いたノヨ)

(櫻の花はまだ咲かないンダワ)

(略) 今女學生が用ふる異様のことはわ奮幕の頃青山に住める御家人の(身分いやしき)
娘がつかひたるがいかにして死灰は再び燃えけむかく流行る事とはなりぬ。

(『貴女の友』25号「○流行言葉」 M20)

また、森銑三は『明治東京逸聞史』(1969)の中で、

(略)「アラよくツてよ」などという言葉は牛込辺の山の手の下等社会の語だつたのが、
その界限のお屋敷へ移り、ひいて下町へも伝えられて、今はそれが中流以上の礼状の言葉
として用いられることになってしまった

(『早稲田文學』 M29.2)

という記載があったとしている。両者とも、「てよだわ」言葉が低い階層から生じた点を述べており、これが「てよだわ」言葉が批判される原因であった。しかし上層下層という意識が、四民平等のもとにタブー視されるようになるにつれ、「てよだわ」言葉への批判は薄れてく。そして、現在では「てよだわ」言葉は、女性の言葉遣いというだけではなく、お嬢様の言葉遣いの典型と意識されるまでに至っている。社会構造の変化が、下層の言葉遣いという批判を一掃してしまった例といえるだろう。

さて、「てよだわ」言葉がその出自から批判されたのに対し、「君」「僕」は先にあげた「●女學生と言語」の中では「男學生の用ゆる常語」と同じ項目に含まれており、女學生が男性

と同じ言葉遣いをするにに対する批判であることがわかる。先にあげた記事の中では女学生の漢語の使用も批判されている。が、漢語の使用は、女子教育の発展とともに「使うべからざる言葉」というレッテルは剥がれてく。これも女性の社会への参加に伴う言語意識の変化といえよう。しかし、漢語とともに槍玉に上がった「君」「僕」の使用に関しては、「君」「僕」の人称代名詞が男性の専用語という意識が強かったせいか、女性が使用する場合には抵抗が見られ、現代でも問題視されている。「君」「僕」が男性の人称代名詞と意識されるようになった時期に関しては、拙稿（2007）で述べたので詳細は割愛するが、すでに明治以前には、男性の人称という意識が生まれていたとされる。このことから、女学生の「君」「僕」は男子の言葉を使用するということで問題になり、この問題は現在にまで至っている。

ただ、記事の論調を見ると、批判の内容は時代とともにかなり変化が見られる。その一例として、次項では女学生の使用する「君」「僕」の問題が、長期に渡り新聞をにぎわせた昭和13年（1938）の記事を中心に、女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化を観察する。

4. 昭和13年の「キミ・ボク」問題

4-1 女学生の使う「君」「僕」に関する見方

昭和13年の「キミ・ボク」問題に入る前に、先にあげた昭和10年（1935）の山川菊榮の評論にある「君」「僕」に関する記述をあげておく。

（略）近頃女學生間の『君・僕』の流行が問題にされる。しかしこれが一般平民の娘の間の流行でなく、表面『遊ばせ』言葉をあやつり慣れてゐる學習院のお姫様方の間から起り、上流有閑層の中に最も行われてゐる流行だといふ鮎が面白い。かの『てよ、だわ』といひ、この『君、僕』といひ、冗漫で虚飾的な女言葉への謀反を意味し、簡素素朴を求めんとして、たまたま下品や粗暴へ行きすぎたものだと見ることはできないだろうか。（略）

（読売新聞 S10.8.5 「読売婦人評論」）

山川は上記の文のまとめとして、「上流階級の古めかしい小面倒な女言葉への反撥と全體としての言葉の簡易化への一つの動向と見られぬこともない」とする。すでに、昭和10年には、女学生の使用する「君」「僕」に対し寛容的な見方があったが、山川菊榮の評論から3年後の昭和13年に、女学生の使う「君」「僕」は文部省の中でゆゆしき言葉遣いとして取り上げられ、長期に渡り論議を呼ぶことになる。

4-2 「キミ・ボク」問題の発端と論争

昭和13年8月6日の朝日新聞に、「やれ・大學改革—女學生には敬語を徹底させよ—」という見出しで、次のような記事が掲載された。

国民精神總動員中央聯盟の社會風潮に関する調査委員會ではかねて政府に對し社會風潮刷新に関する上申書を出してゐたが、五日午後三時から文相官邸で荒木文相、伊東次官、田中社會教育局長等と時局諸問題を語った（略）

（朝日新聞 S.13.8.6）

戦時下、国民精神總動員中央連盟の委員会から大学改革が文部省に進言され、荒木文相以下の論議の中で、「女學生に敬語を徹底させねばならぬ」という意見が交わされたのである。この論議の中では、女學生の敬語の徹底という内容であったが、さらに女學生の男のような言葉遣いにも及び、「キミ・ボク」問題と呼ぶことになる。

朝日新聞昭和13年8月8日には

（略）去る五日荒木文相を中心に催された同委員（国民精神總動員中央聯盟の調査委員）の座談會の席上「女學生の言葉遣ひが亂暴だからもう少し敬語の使用を徹底さすべきである」といふ意見が提出されました。

（朝日新聞 S13.8.8）

とあり、この記述の後に当時の文部省督学官、女高師生徒主事の西野みよしが次のような意見を寄せている。

（略）女學生の言葉が悪くなつたのもこの二十年來の事です。丁度日露戦争前明治三十五、六年頃の女學生は友達同士でさへかう遊ばせ、あゝ遊ばせの遊ばせ言葉でしたが大正初年以後女學生にもスポーツが非常な勢ひで普及した結果、女の態度が活潑になつたのはよろしいが男の眞似をするのがよいとされ、總ての女性が男性化の傾向をとるといつた露悪趣味の時代がありました。（略）

（朝日新聞 S13.8.8）

西野は「女は女らしい言葉遣ひを目指して、より一段の戒心が必要だと思つてゐます」と結んでいる。具体的には敬語を使うことが女性らしくあり、また男の言葉をまねないほうがよい、という内容である。

読売新聞昭和13年8月24日には

近ごろ女學生の間に流行してゐる男同士の會話みたいなあのキミ・ボク口調に對し文部省では戦時下の和撫子ともあらうものが何たる亂暴な言葉遣ひぢや！とひどく冠を曲げ、暑休明けを待つて全國女学校長宛にキミ・ボク語撲滅のきついお布令を出すこと、な

つた、(略) 荒本文相によつて提唱されたこのキミ・ボク撲滅論は一體どんな輿論を喚起するであらうか？

(読売新聞 S13.8.24 夕刊)

とし、女学生の「君」「僕」の撲滅に賛成派の前田若尾(洗足高等女学校(洗足学園)創設者 1888～1947)と現状維持派の市川源三(鴎友学園高等女学校校長 1874～1940)の談話を載せている。前田若尾は

女学生が自分をボク、相手をキミ、第三者をあいつといふ、こんな亂暴な言葉遣ひが見過ごされていゝものでございませうかねえ(中略) 近ごろは男も女も言葉遣ひが亂暴になつてまゐりましたね。文部大臣のいはれたことは、ほんとに私たちの気持ちにぴつたり一致したのでござんすよ。(略)

(読売新聞 S13.8.24 夕刊)

と、当世の女学生が「君」「僕」を使うこと、また敬語の乱れを指摘し、さらには、女学生の言葉の乱れの原因となる映画館や劇場への出入り禁止すべきとした。

一方市川源三は「やがて家庭の妻となり母となる女學生はもつとノビへ」と教育しなければならぬ」という持論を展開し、

キミ・ボクなんて言葉を使つてゐるのは女學生といつても都會のそれもほんの一部の女學生間だけの話で女學生全體の流行ではないのだからそんなに躍起にならなくてもいい、ではないか。

(読売新聞 S13.8.24 夕刊)

と述べ、擁護的な立場をとっている。

当時「キミ・ボク」問題に関する関心は高く、有識者の意見のほか、新聞の読者からの投稿も見られる。朝日新聞昭和13年8月25日には、「女學生の言葉」という題で女学生の「君」「僕」使用の撲滅を奨励している記事が寄せられている。記事の中では「君」「僕」の男性言葉を語る女学生は男性化しているとし、これは「教育に「正しい國語教育」の力が缺けてゐたからである」と述べている。そして最後に「嫁入り資格の一つに「あの女性は正しい言葉遣ひで自由に語り得る」といふことが採用されなければならない。」と結んでいる。

これに対し、読売新聞昭和13年8月26日の「読者眼」という投書欄には、「キミ・ボク是非」という題で2名の投稿が見られる。一つは「振袖姿から短いスカートに着かへた娘さんの中からキミ・ボク位云ふ茶目つ兒が一人や二人出たとて、銃後の守りに何程の影響があらう」と、女学生の言葉遣いを問題にする文部省を揶揄する内容の記事である。もう一つは「教育とは若い人を萎縮し頹廢させることなく、若い魂を飛躍させることである。」とし、女学生の使

う「君」「僕」に目くじらを立てることを諫めた内容である。また同新聞昭和13年8月27日には正宗白鳥が意見を寄せている。正宗白鳥は、女学生が「君」「僕」を使うのを聞くと異様な感じがすると述べてはいるが、次のようにも述べている。

（略）私が年少の頃、小學を終り私塾に入つた時、「君、僕、失敬」といふ當時の書生言葉を知り覺えて、子供の境地を脱したは潑刺とした氣持を覺えたことがあつた（中略）若い女性は、私などが年少の頃味はつたやうな潑刺たる感じを「キミ・ボク」などの發音によつて感じてゐるのであらう。無思慮であるにちがひないが、かういふ所から舊習を脱した新しい女性語がおのづから作りだされるやうになるかもしれない。

（読売新聞 S13.8.27 夕刊）

読売新聞昭和13年9月1日には稲原勝治が「キミ・ボク論」と題し、次のように述べている。

キミ・ボクが男の言葉なればこそ、女が好んで使用するのである。下町邊には太郎とか、助六とか、勝太郎とか、甚しきに至りては権兵衛をまで名乗るところの職業婦人が蔓延して居る筈である。性の錯倒とか云ヤツださうだが、キミ・ボクまた或ひは同じカテゴリーに分類さるべきシロモノであるかも知れぬ。何れの場合においても狙ふところのものは一つ。すなわち刺激といふこと。その外には大凡そ意味ない。

（読売新聞 S13.9.1 夕刊）

正宗白鳥と稲原勝治の記述も、女学生の「君」「僕」使用を、新時代へ向かう女性の主張の一つとしてとらえている。明治から大正にかけての新聞では女学生の使う「君」「僕」を真つ向から否定する記述が多かったのに比べ、女性が社会へ進出するための一つのパフォーマンスである、と客観的に捉える姿勢が見られる。その使用の是非はさておき、何故に女学生が「君」「僕」をはじめとした男性の言葉を使うのか、この点を言及しているところが目立つのが、昭和13年の評論記事の特徴である。

同年の10月に入ると萩原朔太郎が、朝日新聞に記事を寄せている。これは、男性が「キミ」言葉を女性に対して使うことへの批判を述べたものである。

男が同姓間で使ふ人代名詞を異性の女に對して使ふといふのは、男性それ自身が既に女性を中性視し、無意識の中に女を中性化するものである。

（朝日新聞 S13.10.4 「キミ言葉」）

また、柳田國男も朝日新聞昭和13年11月6, 7, 8日と3回にわたって「キミ・ボク」問題と題し意見を寄せている。その内容は、「僕」「君」の人称の歴史的な話にも及び、女學生のみに「僕」「君」を禁じるのはおかしいとする。そして最終的には

法令や告諭の力で國語變化の方向がきまらうとは私は思つていない。もし力が有るなら

ばせめては次の代を代表すべき人たちに、もつと上品でさわやかで、不愉快な聯想を起させない単語を選択し取捨するだけの能力を吹つ込むやうにするがよい。

(朝日新聞 S13.11.8 「キミ・ボク」問題)

と述べている。女学生の言葉遣いのみ批判するのではなく男性も含め言葉遣い全体について改めて考えるべきという内容である。

4-3 意見の傾向

昭和 13 年の文部省のお達しに始まる「キミ・ボク」問題は、翌年の昭和 14 年まで議論が続くが、本稿ではその記事は割愛する。さて、当時の記事の内容からその意見の傾向をみると、女学生の使用する「君」「僕」をやみくもに否定する内容が少ないことが目立つ。依然として女学生の使用する「君」「僕」の撲滅を推進する意見もみられるが、これを、むしろ時代の風潮として受け止める内容が多い。女学生が「君」「僕」を使うことに対しては好ましいとは考えていないようであるが、一時の流行として許容すればいいという論調が多い点が特徴的である。明治時代に、女学生が使う「君」「僕」が強い批判を受けていたのに比べると、大分その論調には変化が認められる。これは、女性の社会進出という時代の流れに応じた社会意識の変化を如実に反映したものといえよう。

5. 現代における言葉遣いの中性化

戦後の新聞記事にも、女学生の言葉遣いに対する記事は見られる。時には乱れた敬語の使用に関して、時には乱暴な言葉遣いに関する批判記事であるが、近年目につくのは、言葉の中性化という記事である。北海道新聞昭和 61 年（1989）1 月 4 日には「男語、女語」という題で言葉の中性化に対する記事が見られる。

信号でたまたま待ち合す格好となった、かの長髪二人組の会話が耳に突き刺さってくる。「お前、そんなこともしらないのかヨォ」ー。(中略) 耳録音を始めて、逆に男の子の言葉にもなにやら女性化しているのに気がついた。流行(?) のダブダブ・ルックでキメた若者が「じゃあネ、バイビー」とか「スイマシェーン」とか言い合っている。

(北海道新聞 S61.1.4 「男語、女語」)

女学生二人組の会話にみる男性語化と男性の女性語化を対比させ、両者の言葉が近寄ってきていることを、やや悲哀をこめて述べた内容である。

朝日新聞平成元年（1992）10 月 21 日「いま東京語は」というシリーズ第 6 回には「交錯し、

中性化する男女の言葉」という題で次のような記事が載せられている。

「先生、きょうプリント忘れちゃったあ」

教師に対して、なれなれしい口調で話しかける女子高校生が増えた。友達同士で教師を話題にすると、女子大生の五人に一人が「さん付け」でいい、呼び捨ても増えている、という。大学のエレベーターで、女子学生が「オスッ」とあいさつしていて、びっくりした教師もいる。

女性の言葉が荒っぽくなったといわれて久しい。

最近では、事態はさらに進んで、若い男性の女性語化現象が起こっている。大学のキャンパスで男の学生が、「その本にとって」「だれが書いたの」などというのは、普通になりつつある。昼食の誘いも「メシたべる」であって、「くう」が使われなくなった、という。(略)

(朝日新聞 H 元 10.21 「いま東京語は」)

この記事も男女の言葉の垣根が低くなり、中性化が進む現象を述べたものである。

同年代の新聞記事には、言葉遣いだけではなく性別そのものに関する意識の変化も見られる。読売新聞平成3年(1995)12月4日の記事には「薄れる性別意識」という見出しで「男らしさ」「女らしさ」に対する意識調査が掲載されている。

〈外見ばかり気にしている責任感のない男〉と〈言葉遣いが悪く自己主張が強すぎる女〉一。読売新聞社が先月(11月)十八、十九の両日に実施した全国世論調査で、伝統的な「男らしさ」「女らしさ」を失いつつある、こんな現代の男女像の一端が浮き彫りになった。ファッションの多様化による男性の女性化、権利意識の浸透による女性の男性化が指摘される中、「男らしさ」「女らしさ」という言葉に抵抗を感じる人も四人に一人を占め、” ユニセックス時代 ” の男女観の複雑さがうかがえる。

(読売新聞 H3.12.4)

調査結果では「男らしさ」のトップは「自分の意見を持っている」次いで「責任逃れをしない」「頼りがいがある」など、「女らしさ」では、「思いやりがある」が圧倒的に多い結果であったとする。しかし、いずれのトップも、「男らしさ」「女らしさ」というより、男女の枠組みを超えた人間性を求める回答ともいえるようである。

読売新聞平成4年(1996)5月14日には「「男らしさ」「女らしさ」から解放 性にこだわらぬ教育を」という見出しで、次の記事が見られる。

「ぞうきんがけは女」と初めから決めたり、出席簿は「男子が先で女子は後」となっていたり。必然性がないのに、男女に分けることで、不平等につながっていることは往々にしてある」(中略)授業中に男子から指名したり、行事での重要な役割をいつも男子にや

らせるなど、先生が日々の教育現場で無意識のうちに子供たちに植え付けてしまう「隠れたカリキュラム」が、こうした性差別を生む原因になっているとの指摘も出ている。

(読売新聞 H4.5.14)

社会的、文化的に作り出されてきた不必要な性差別をなくそう、という都内の5つの小中学校の取り組みを示した内容である。

おわりに

以上、本稿では昭和13年の「キミ・ボク」問題の記事を中心に、女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化を、新聞記事を通して考察した。男女間の言葉の接近に関しては近年多くの研究があり⁽⁶⁾、また寿岳(1979)をはじめ、男女の言葉の中にある差別意識をテーマとした研究も進んでいる。その中で「君」「僕」という人称代名詞に対する意識も、少なからず変化が見られるようである⁽⁷⁾。まだ男性専用の人称代名詞という意識は強いが、現代では女性が部下に対し、「君」を使う例も聞かれる⁽⁸⁾。「君」「僕」が男性専用に使われる人称代名詞として生き残るのか、男女の枠組みを超え中性化された人称代名詞となるのか、今後の流れに注目していきたい。

注

- (1) 「女学生」に関しては『日本国語大辞典』二版(2000)に、「女子の生徒。また、女学校の生徒。」とあり、その語誌は次のように記されている。

(略) 明治時代初年に各地で女学校が開校され、女性にも学問の道が開かれた。「女学生」という呼称は中等教育を行なう女学校の生徒を指すものとしてその頃に生まれたが、当初は「女生」「女生徒」のほか様々な語が使われた。「女学生」の語が一般化し一種の都市風俗として定着するのは明治二〇年代以降である。

本稿では、女学生の延長として、現代の女子高生女子大生も含め「女学生」として扱う。

- (2) 『女學雑誌』202号(明治23年)の「時事」欄では「女學生の風聞」「風聞の出所」「出所の製造元」「よし之ありとするも」という題で、この記事に対する批判を行ったが、これに対し読売新聞明治23年3月2日に「男子不道德なるが故に女子の不道德を不問に附すべしと云ふ議論は何人といえども首肯せざるべし」という反論記事を載せている。この後、『女學雑誌』の担当者が日就社を訪れ具体的に質問を行うなど『女學雑誌』204号まで論戦が繰り広げられている。

- (3) 江戸時代の女性の雑書である『女重宝記』(1692)の巻之一には、次のようにある。

男の詞づかひを女のいひたるは、耳に当りて聞にくきものなり。女の詞は片言まじりに柔らかなるこそよけれ。文字にあたり、こぼしなどしていふ事、返す―悪しき事なり。

「文字に」あたり」とは漢語を使用することであり、女性が漢語のような難しい詞を使うことは小賢

しいと戒める内容である。

- (4) ここで使用する「外来語」という言葉は、外国から入ってきた言葉であり、まだ日本語化されていない言葉も含む。
- (5) 『當世書生氣質』の中には、「マネイ」「インポッシブル（難行だ）」「フィニッシュ（完結）」「アンビション（功名心）」などの外来語が見られ、当時外国から来た言葉を書生が好んで使用したことが窺われる。
- (6) 尾崎（2004）の中で報告された、国立国語研究所 1997 年の日本語における言葉の男女差の調査、「あしたは雨だ」という内容を伝える場合、「雨よ」「雨ね」「降るわよ」「雨だわよ」「雨だよ」「雨だね」「降るよ」「雨だぞ」「雨だぜ」の表現を使うか否かという質問に対して、全体としては「雨よ」「雨ね」「降るわよ」に関しては女性の使用の割合が多く、反対に「雨だぞ」「雨だぜ」に関しては男性の使用の割合が多いという結果であった。しかし、年齢別に見ると、若年層ほど女性専用の文末形式の使用の低下が見られ、「雨だよ」、「雨だね」、「降るよ」の形の方が一般的であり、男性も若い世代では、「ぞ」や「ぜ」といった男性専用の終助詞を用いた表現より、「雨だよ」「雨だね」などの中間的な表現の方が多く使用されるという結果が表れている。また、高橋（2002）には、女子学生同士の自由会話の場面が載っているが、「～だよね」という男女の言葉遣いの中間的な文末表現や、「すげー」「うるせー」などの乱暴な言葉遣いが見られる。小林（2007）では「十五年ほど前より女子学生において、「あら、雨だわ」ではなく「あっ、雨だ」が聞かれ、「おなか、へったわ」ではなく、「はらへった」が聞かれるようになった。」とある。
- (7) 遠藤（2001）では大学生 186 人の女の子の「ボク」使用に関するレポートを分析し、次のように結んでいる。

従来は、「ボク」使用に強い干渉があり、その結果、大人になれば言わなくなっていたが、大人になっても言う人が増えていることへの変化。「ボク」だけから、「オレ」にも広がっている実態。そして、学生たちの声でわかるように、ことばへの性差があることへの根本に迫る疑問、批判が読み取れる。

こうした批判と「ボク・オレ」許容の流れは、このところ多くの若者の人気を集めているという。浜崎あゆみの歌の歌詞などの影響も考えられる。（中略）歌の中とはいえ、このような「ボク」が社会に受け入れられている現実を見る時、「ボク・オレ」がもっと使いやすくなる日も遠くないことが予想できるのである。

- (8) 現代では一人称代名詞に「僕」を好む「僕っ娘」という風俗も生まれているようである。

参考文献

- 遠藤織枝, 2001, 「女の子の「ボク・オレ」はおかしくない」, 『女とことば』, 明石書店
尾崎喜光, 2004, 「日本語の男女差の現状と評価意識」, 『日本語学』, 23-7, 明治書院
小林千草, 2007, 『女ことばはどこへ消えたか?』, 光文社
寿岳章子, 1979, 『日本語と女』, 岩波書店
高橋 巖, 2002, 『日本語の女ことば』, 高文堂出版社
長崎靖子, 2007, 「人称代名詞「僕」「君」の変遷」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 18-3

女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化

参考資料

明治・大正・昭和の読売新聞 読売新聞社
朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」朝日新聞社
郵便報知新聞 明治7年1月15日
北海道新聞 昭和64年1月4日